Communication

システム思考におけるに目的論構造と社会倫理について　XIV

～L. Ciompi　「システム理論における感情の意義について」～

On System Thinking, Teleological Structure and Social Morality XIV

Ciompis' Note "On the Significance of Emotions in System Theory"

Yasumasa Arai
Tel: 042 795 3348
Email:　araraiypol1a@ozzio.jp/
Minami-Tsukushino, Machida, Tokyo,
Tokyo, Japan　194-0002

荒井康全
Tel: 042 795 3348
東京都町田市南つくし野 4-11-22

2022-2-1 版

(Abstract)　This is an article which pays regard to Luc Ciompi (born 1929), Swiss psychiatrist, Schizophrenia researcher, pioneer of integrative psychiatry and founder of Affect-Logic celebrates his 90th birthday.　He particularly claims a frame of paradigm with regard to the significance of emotions and their interactions with thinking and acting, current concepts

He widely to proposes ten of central theses on the interaction of emotion and cognition. especially with stress to pay his focus on methodological scope to so called Fractal phenomena, such as bifurcation, or non equilibrium phenomena, as cybernetically dynamical system with respect to social and mental process, which hopefully plays both in the psychological and in the social sphere, as indispendable regulators of behaviour and reducers of complexity.

(Key words): emotion, cognition, Fractal, social and mental process

（要約）Ciompi L. はスイスの精神治療医師である。ドイツ語圏でのシステム理論は Niklas Luhmann の現象構造理解を核とする理論がひろく理解されている。Ciompi は社会的空気が個々の感情と思考の結合単位との単位間の相互作用状態をシステム上の高次構造としてとらえた。これが動力学的（時間）に変化するものとしその'複雑構造'をフラクタル構造としてとらえ、これを使っての感覚と思考からの行為（なんらかの出力）を階層的システムモデル化し、それによって多様に変化する社会的感情出現の現象論的理解と予測の方法論の分野発展の提案をよびかけている。本稿はかれの提案１０項目の概容の紹介である。Ciompi は現在９１歳でなお健在であることをつたえてぉきている。

（キーワード）；感情、認知、フラクタル理論、社会、こころ

Summary Brief;

Luc Ciompi (born 1929), Swiss psychiatrist, Schizophrenia researcher, pioneer of integrative psychiatry and founder of Affect-Logic celebrates his 90th birthday.

In his opinion, the system-theoretical understanding of psychological and social processes that presently prevails at least in the German-speaking world is too strongly influenced by the concepts of the sociologist Niklas Luhmann and requires a thorough revision and clarification in several respects.

Particularly with regard to the significance of emotions and their interactions with thinking and acting, current concepts

He claims widely here ten central theses on the interaction of emotion and cognition. One point is especially stressed to pay his focus on methodological scope to Fractal phenomena, such as bifurcation, or non equilibrium phenomena, as cybernetically dynamical system with respect to social and mental process.

It hopefully plays a crucial role, both in the psychological and in the social sphere, as indispendable regulators of behaviour and reducers of complexity.

He lets us participate in his personal, scientific and ideological reflections. It shows, that even an old age can be a fascinating time full of unexpected highs and lows.

記事本文[1]

著者 Ciompi の意見として、心理学的および社会的プロセスについてのシステム-理論的理解は特にドイツ語圏では社会学者 Niklas Lumann の概念が非常に強力な影響下にあって、いくつの意味で全体をとおしての見直しと明確化が求められていると考えるものである。

特に、感情の意義と思考および行動との相互作用についての概念としては、Rosemarie Welter-Enderlin の“emotional framing” 感情的枠組み[2] や Fritz Simon の “symbolically generalized communication media”シンボリック的に一般化されたコミュニケーション媒体論[3]のような感情についての考察があるがこれらは実践的もしくは理論利用にひろく供す

---

[1] Tags: Luc Ciompi, Blog Ciompi, Affect-logic

“On the Significance of Emotions in System Theory”

[2] Welter-Enderlin R., Hildenbrand B. (Ed.) (1998).: Gefühle und Systeme. Die emotionale Rahmung beraterischer und therapeutischer Prozesse. Auer, Heidelberg.

[3] Simon F.B. (2004). Zur Systemtheorie der Emotionen. In Baeker D (Hrsg) Soziologie der Emotion. Soziale Systeme 10: 111-139. Wagner E., Russlinger F. (2016). Emotionsbasierte

るにはあまりにもおおまかなもののようにみえるのである。
感情のエネルギー-動力学的役割りについては一般にあまりにも注意が払われていない。
Elisabeth Wagner の情報論的新著ならびに Ulrike Russinger の感情中心におく心理療法もまたその意味[4]で十分な解明をあたえていない。
著者は数年まえに“A Blind Spot in Niklas Luhmann?... [5],という報文でつぎのことを詳しく説明した、それは Luhmann の説では感情は心理学的領域に属していて社会科学では適切なものではない、ときとして感情は研究での論理遂行上の障害や警告的外乱（ノイズ）として社会科学では位置づけてきたのであるが、これは再考すべきものであると主張する。
この著者の見解としては、感情こそが、逆に、社会の場での中核的な役割りを演じるとするのである。
Luhmann は驚くほど　集合的感情が社会的紛争と緊張をよび混沌に起動をかける事実に注意を払わず、決定づけるのは駆動とエネルギー供給原としての functions 機能であると言い続けるのである。Luhmann は機能こそがミクロ社会とマクロ社会のプロセスの動力学の駆動力として位置付けうるとするのである。
家庭内不和、集団的パニックや集団的熱狂、抗議運動、また革命はこの問題への分かりやすい例を与える。
長期にわたる社会的プロセス、たとえば社会での女性の役割りにおいての数十年にわたる漸進的変化にみるようにこれらは感情的エネルギーが究極的に駆動をかけてきたものである。
さらに、(Simon の仮説であるが、) 感情はコミュニケーションの媒体としては必要不可欠なものであり、そのコミュニケーションそれ自体が顕著な社会現象なのである。
この著者の主張は、感情抜きの情報（もしくは“emotional framing”感情的枠組みを除いた情報）は実践的には効果のないものに留まるということは真であるとさえいえる、すなわ

---

systemische Therapie. Intrapsychische Prozesse verstehen und behandeln (Emotion-based systemic therapy. Under, 2016tandin, 2016g and treatment of int-rapsychic processes) Klett- Cotta Stuttgart.

[4] Ciompi L. (2004) Ein blinder Fleck bei Niklas Luhmann? Soziodyna-mische Wirkungen von Emotionen nach dem Konzept der fraktalen Af-fektlogik. (A Blind Spot in Niklas Luhmann? Sociodynamic effects of emotions according to the concept of fractal affect logic) Soziale Systeme 10:21-49.

[5] Luhmann N. (1995) Social Systems. Stanford University Press - Luh-mann, N. (2012) Theory of Society, Vol. 1. Stanford University Press.

ちそのようなものは注意を喚起はするがなんら我々の思考のなかで統合化されないからである。
そして最終的にして、しかし少なからず、価値システムは正または負の感情にリンクするのであり、重要な役割りを担うのであり、それは心理学的にもそして社会的圏においても行為についての必要不可欠な規律者として、そして複雑性についての帰納的解釈者として双方において位置づけとなるのである。

１０個の中核的項目、感情と認知の相互作用について
以下に非常に簡単ではあるがまとめる、１０個のもっとも重要な感情と認知の相互作用に関する綱目である、これらは著者の意見として、精神と社会システムについての現在存在する理論のなかに系統的に組み込まれていくべきである。
１．感情と認知は精神と社会プロセスにおいて循環的に相互作用する。
特定の認知は特定の感情にトリガーをかける、そして特定の感情はそれらの特定のスイッチングとフィルター効果をとおして認知に影響する。[6]

２．感情は comprehensive 共感性、psychosomatic moods 心身的気分からの進化性に根ざす。これは意識に変化する duration 持続性、intensity 意図性、そして proximity 近郊性である。
それらは特定のエネルギー性と組みあわされ（もしくはエネルギー消費パターン）その moving うごきの basic tendency 基本傾向は certain cognitive objects しかるべき認知対象に "away from" 離れるかあるいは"toward"向かうかである。[7]
３．集合的感情はどのような規模の集合体であってもそのメンバーの多数派や少数派によってシェアされる感情である。
集合的感情エネルギーは、もし同じ方向に向かうなら、顕著場としての社会的効果をもつことができる。[8]
４．Cognitions 認知（これは perception 感受, attention,注目 memory 記憶, combinatory thinking 結合的思考, および decision-making 意思決定）は sensory distinctions,感覚的区別、

---

[6] Emotion and cognition interact in a circular way in all mental and social processes. Specific cognitions trigger specific emotions, and specific emotions influence cognition through their specific switching and filtering effects.
[7] see Ciompi, L. (1997) Die emotionalen Grundlagen des Denkens. Ent-wurf einer fraktalen Affektlogik (The Emotional Foundations of Thinking. An Outline of a Fractal Affect Logic), Vandenhoeck & Ruprecht, Göttin-gen 1997. p.. 126 ff.
[8] Damasio A.: Descartes' error. Emotion, reason and the human brain, Grosset/Putnam, New York 1994.

もしくは Soncer-Brown [9]の意味で、区別についての区別に究極的に基づいている。[10]
５．同時的に経験された感情、認知、そして行為は記憶に integrated feeling-thinking-behaving programs,総合化された感覚-思考-行為プログラム(FTB programs)にストアされる、これが類似状況での未来行為をコントロールする。[11]

６．種々のサイズの FTB programs はその psyche の basic 基本となる "building blocks" を形成する。
FTB programs の合計は personality-specific,個人特定 group-specific グループ特定、そして culture-specific affective-cognitive views of the world その世界での文化-特定的影響-認知見解 ("Eigenworlds"固有世界)の結果のものである。[12]
７．個人 FTB programs および個人もしくは集合的感情 -認知的 affective-cognitive worldviews な世界観はそのシステム-理論的意味での典型的システムに対応する。ここでは equilibration 平衡化(homoeostasis ホメオスタシス）または transformation 移行化(morphogenesis 形態発現)は正もしくは負の feedback mechanisms.帰還機構の多重性によって規制される。[13]
８．認知は精神および社会のシステムの構造を決定し、そして感情はその動力学を決定する。[14]
９．FTB systems でのいかなる次元において。限界判断的に起る感情-エネルギー的緊張は

---

[9] Spencer-Brown G. (1979.)Laws of form. Durron, New York.
[10] Cognitions (such as perception, attention, memory, combinatory thinking, and decision-making) are ultimately based on sensory distinctions, or distinctions of distinctions in the sense of Spencer-Brown.

[11] Simultaneously experienced emotions, cognitions, and behaviors are stored in memory as integrated feeling-thinking-behaving programs (FTB programs), which control future behavior in similar situations.
[12] FTB programs of various sizes form the basic "building blocks" of the psyche.
The sum of FTB programs result in personality-specific, group-specific and culture-specific affective-cognitive views of the world ("Eigenworlds").
[13] Both individual FTB programs and individual or collective affective-cognitive worldviews correspond to typical systems in the system-theoretical sense, whose equilibration (homoeostasis) or transformation (morphogenesis) is regulated by a multitude of positive and negative feedback mechanisms.
[14] Cognitions determine the structure and emotions determine the dynamics of mental and social systems.

突然的非線形シフト（a bifurcation 分岐)を引き起こし感覚の別途のグローバルパターンに向かわせる（たとえば、a “logic of peace 平和論理” から a “logic of war,戦争論理”、日常論理から恐怖や怒りの論理へ、特定の配置をもつ人物にあるものからの“psychotic logic.”精神病的な論理世界へ）[15]

１０．感情と認知との間の-およそ循環的-相互作用はフラクタル的構造化される；それらは精神的および如何なる次元の社会システムにおいて self-similar 自己類似的である。[16]

これらの項目すべては affect logic.影響論理の概念にもとづいているのである。
このことをさらに詳しく説明するのにはあまりには紙面が限られているこの場ではあまりに遠く、困難であり私の著書で事例を見てほしい。
しかしながら、これらの仮定によって提供されたシステム理論が提供することになるたくさんの利点を簡単にあげることができよう。
これらの１０項目を精神的ならびに社会的プロセスについてのシステム理論に持ち込むことのよき理由である。
上記すべてにわたり、感情についての心理学的動力学と社会的動力学効果はすぐれて精神的ならびに社会的プロセスのシステム理論のなかにおいて重要性に基づいて、統合化されるのである。それは非鮮明にして周辺的役割りにおいてのみ演ずるこれまでの方法論に替わるものである。
同時に実践的および理論的に意味ある継続性が確立されるである、これは感情と認知的次元のプロセスにとどまらず、精神的と社会的プロセスへとおよぶのである。
一般に感情と認知について、それを現象とみるときに、多重的な現象次元の構造でも双方での相互作用をより理解することができよう。この現象ではその構成要素が不十分に明示化された状況においての相互作用となるからである（たとえば、信頼／非信頼、恥辱、嫉妬などである)。
同じことがつぎのような意識にたいしても有効である。“institutional climate 制度論的空気、“mentality” モノの考え方や気質、“class spirit”階級的精神などは FTB プログラムやシステムの典型問題を形成しよう。

---

[15] In FTB systems of any dimension, critically rising emotion-energetic tensions can cause a sudden nonlinear shift (a bifurcation) into another global pattern of feeling, thinking, and behaving (for example, from a “logic of peace” to a “logic of war,” from an everyday logic to a logic of fear or anger, or also, in persons with a specific disposition, to a “psychotic logic.”

[16] The -mostly circular - interactions between emotion and cognition are fractally structured; they are self-similar in mental and social systems of any dimension.

そこに含まれた認知がこのシステムの内容と構造を決定する、そしてここに含まれた感情の切り替え効果がその動力学を決定する（e.g. 防御と回避行為、または反対に、接近と結合行為)。
これらのふたつの要素の間での相違性と場所をこえた相互性を明解に把握することは影響的感情と／あるいは認知への実際的可能性を提供する。
提案されている概念化についての別途の有利としては、その経済性がある。
事実、感情と認知の described interplay 記述化相互活動は顕著な効率と経済性の進化によって生みだされた発生的二進コード[17]に対応しているのである。
基本となる感情的状態は限られた数でありこれが、認知対象は無限の数で、それとの結合よって、このコードは無限多様な経験ベース FTB プログラムを発生することが可能となり、このプログラムが生存のための奉仕ということにおいて思考と行為をすべてをコントロールする。
このコードはより経済的にすぐれているとさえいえる結果をみせている、ひとをして、わたし Ciompi が埋め込んだ仮説であると次のように考えるときにである、ここでは、感情的要素はすでに組み込まれておりそれに沿って有意に演じている初期構成での有意な構造的役割りと記憶のなかでの FTB 系でのストレージによってきまるのである。[18]
Antonio Damasio 提案による謂うところの marker hypothesis マーク付け仮説と全く類似したものである。[19]

多元的実用内容
これらの概念によって装備されたシステム理論の実用的な内容は、つぎの状態のときに明示的になる；あらゆる種の精神的もしくは社会的システムの動力学的状況たとえば紛争の管理や、精神治療や、危機介入や仲裁といった状況にあるときである。

---

[17] ここでいう2進コードについて具体的な記述は、不明である. 感情と認知の情報論的透明化については2進法的な Yes/No のコードをもつ状態マトリクスを発生させる発想がある。
神経学者 Jurio Tononi の情報統合化理論 Tnonini Information Integration Theory(ITT)でのφ関数や Bernard Baars の競合入力科にあるシステムの入力と出力との impulse 応答のような制御工学的なモデル global workforce 理論などがとりあえずヒントになるかもしれない。Stanford Encyclopedia of Philosophy の Consciousness の 9-5 と9-6を参照されたい。

[18] Damasio A.: Descartes' error. Emotion, reason and the human brain, Grosset/Putnam, New York 1994.

[19] Ciompi, L., Endert, E. (2011) Gefühle machen Geschichte. Die Wirkung kol-lektiver Emotionen - von Hitler bis Obama（Feelings Make History. The Effects of Collective Emotions - from Hitler to Obma) Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen.

思考と行為の感情のエネルギー化された効果は組織体の運営、宣伝、また political propaganda24 という政治的宣伝での中核的役割りを演じている。
この事実は永い時間のあいだ使われてきた、当初は、より直観的ベースに乗っていたが、より最近ではさらなる高度に知的な内容をくわえた科学的ベースにのっている。
ひとつの例として現在の米英のコンサルタントである Cambridge Analytics による Facebook 情報についての Big Data analyses 巨大データ解析がスキャンダル的なデータ解析であることをあげることができる。この結果 2016 年の選挙投票で二大政党が極端に肉薄した結果になってあらわれたことに統計的にすべて決定的貢献をしている；
欧州連合からのイングランドの脱離運動(the "Brexit")、およびアメリカ大統領選で Hillary Clinton にたいして Donald Trump の選挙運動がそれである。

Luc Ciompi(1929 生まれ)、スイスの精神科医師、結合失調症研究者、統合的精神廟のパイオニア、かつ Affect-Logic の創設者である。いま九十歳の誕生を祝う。
彼はわれわれに彼自身の，科学的および思想的反省に参加することを許している。それは高齢であることでさえ期待せざる高揚のうねりに満ちた魅力的な時間にあることが可能であることを証明するものである。

Ciompi が自ら推奨する著書を以下にあげておく；
１． Ciompi m ,L.(1997)　Die emotionlalen Grundlagen des Dennkens,Ent-wurf einer fraktalen Affedtlogik, Vandenhoeck & Ruprechi, Goetingen 1997
邦訳版；ルック・チオンピ、訳山岸、野間、菅原、松本　「基礎としての情動　フラクタル感情論理の構想」、学樹書院　2005
２．ルック・チオンピ、訳　松本、井上、菅原、　「感情論理」、学樹書院、1994
３．河本英雄、L.チオンピ、花村誠一、W,フランケンブルグ「精神医学」青土社，　1008

SNS では以下のキーで検索されたい；
Tags: Luc Ciompi, Blog Ciompi, Affect-logic